（第１号様式）

教育情報に関する連絡表

【　教育情報提供者記入欄　】	情報提供年月日	平成　２９年　１０月　４日

情報提供者等	（フリガナ） 氏　　名		性別	①　男性（○） ②　女性
	住　　所	岐阜県　　中津川（市）・町・村　（郡名は記入しない。）		
	年　　齢	①２０歳代　②３０歳代　③４０歳代　④５０歳代　（⑤）６０歳代		
	情報の種類	（①）意見　②要望　③情報提供　④質問		
	回答の希望	（①）教育委員会の回答を希望　②教育情報のみで回答は不要		
情報のテーマ	（１テーマにつき、１枚の連絡表をご使用ください。） 特別支援学校への進学に関わる現状			

特別支援教育の充実に向けて、岐阜県内にも支援学校が増設され、支援学校の受け入れ態勢も多様な障がいに対応できるよう拡充と整備が進められているのを実感しています。

そんな中で、特別支援学校の役割がますます複雑で多岐になりつつあるように感じています。通常の小中学校では対応に苦慮する子どもが、学校での現状と保護者の意向それに専門的な見地を総合して、最終的に支援学校への進学を選択している事と思いますが、その子にとってベストだから支援学校を選択したのか、選択肢が他にないから選択したのかが曖昧なまま進学してくる子が多いのではないかと思います。

例えば、小中学校で学校生活に不適応を起こした子どもの受け皿に、支援学校がなっていることもあるのではないでしょうか？その子どもにとっては、支援学校がベストの選択かもしれませんが、その子が進学してくることで、本当に支援学校で支援をしてあげなければならない子ども達への支援が疎かになってしまうことが懸念されます。障がい者手帳のない子どもが、医師の診断に左右されるとは思われますが、進学に切迫すると急いで療育手帳を取得したり、病弱の診断を受けたりして、支援学校へ進学してくるケースもあると聞いています。保護者の希望もあるかと思いますが、小中学校の進路指導が、支援学校へ進学させれば後はなんとかなる、と言えるような安易な対応になっているかもしれません。

支援学校の本来の役割は、量や数への対応ではなく、本当に特別の支援の必要な子どもへの質的に深くて手厚い支援に力を注ぐ事だと思います。今後、量に対応するためではなく、質に対応できる支援学校の整備をどう進めていくか？考えていかないと、ますます支援学校の増設や定員増ばかりの応急措置に追われたり、専門的に対応できる教員の不足につながったりするように思います。